彙　報

木簡学会第三回総会および研究集会

第三回木簡学会総会と研究集会は例年どおり、十二月の第一土曜日、日曜日にかけて行なわれた。場所は、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館の講堂を使用した。参加会員は一〇〇名近く、総会・研究集会とも充実した討議が行なわれた。研究集会は第一日三名・第二日四名の報告を行ない、それをめぐって討論が行なわれたが、栃木・石川等の地方の木簡や中国簡の書風の問題なども含めて幅広い内容の研究集会となった。さらに、当日は会場に下野国府跡や、石川県高堂遺跡などの木簡が遠方から運び込まれ、参加者は木簡を目のあたりにして検討を進めることができ、研究集会の内容を一段と深めることができた。いつもながら、各発掘担当者・機関等の御好意に厚く感謝したい。

◇十二月二日（土）午後一時五分から第三回総会が始められた。

第三回総会（議長　北村文治氏）

岸俊男会長の挨拶のあと、北村文治氏を議長に選出して、総会議事を進めた。

会務・編集報告（佐藤委員）

本学会の一年間の会務活動と会誌編集について、次のような報告があり、異議なく了承された。会務報告は、まず会員数が順調に増加していることを述べ、昨年度大会時にくらべて新入会員が一二名となり、総会の時点で一五四名になったことが報告された。編集については、会誌第三号を一〇〇〇部印刷したこと、また第二号を二五〇部増刷したこと、また一九八〇年、八一年の出土木簡については、各地の諸機関の御協力によって情報を十分に収集しえたことなどが報告され、さらに会誌の充実のためには会員からの積極的な投稿が望ましい旨報告があり、投稿規定を決めることとなった。

会計報告（岩本委員）

一九八〇年度（一九八〇年四月～八一年三月）の会計について、収支決算の報告と説明とが行なわれた。また八〇年度会計については、八一年六月五日に監事の関晃氏・土田直鎮氏によって監査が行なわれ、帳簿類は誤りなく整理され、会計執行が正当に行なわれた旨、土田氏より報告が行なわれ、異議なく承認された。

総会の後、二時半より研究集会が開催された。

研究集会（議長　青木和夫氏）

居延の草書簡　藤枝　晃

呪符木簡の系譜　和田　萃

庸米付札について　狩野　久

藤枝報告は永年にわたる氏による木簡の調査・研究を通じての

内容で、漢簡では数少ない草書木簡の機能的な特質を解明したもので、日本簡の即物的な研究には示唆するところの大きなものであった。和田報告については『木簡研究』第四号（本号）に収載することができた。また狩野報告はすでに第三号に収載されており、参加者は会誌を参照しつつ報告をきくことができた。

◇十二月三日（日）

研究集会（議長　原　秀三郎氏）

前日にひきつづいて、研究集会が行なわれた。報告は次の四本であった。

最近の各地遺跡出土の木簡　鬼頭清明

石川県小松市高堂遺跡出土の木簡について　戸淵幹夫

下野国府出土の木簡について　田熊清彦・平川　南

一九八一年の平城宮跡出土木簡　佐藤　信

この四つの報告はいずれも本号に内容の一部を収載している。また、昼食時の休憩時間を利用して、平城宮跡内の発掘現場（第一三三次）を見学した。発掘地点は宮南面西門付近で、木簡が出土した二条大路北側溝等をみることができた。

委員会報告

◇一九八二年六月一七日

第四回木簡学会総会・研究集会の日程・報告内容について検討し、『木簡研究』第四号の編集方針の大要を決めた。また、新規入会申し込み者については四名の方々の申し込みを受理して、入会を承認した。なお、一九八一年度の会計報告があり、検討され、大会までに監査をうけることとした。

◇一九八二年十月三十日

第四回木簡学会の総会・研究集会の内容・日時をほぼ確定した。また、『木簡研究』第四号の編集経過が報告され、ほぼ、頒価据え置きで刊行できる見通しであることが指摘された。さらに新規入会者としては二名の申し込みがあり、承認された　また、今年度は委員の改選時期に当るため、大会に提出すべき役員の候補について若干討議がなされた。

木簡学会　役員

会　長　岸　俊男

副会長　大庭　脩　平野　邦雄

委　員　青木　和夫　岩本　次郎　岡崎　敬

門脇　禎二　狩野　久　鬼頭　清明

佐藤　宗諄　田中　琢　田中　稔

坪井　清足　直木孝次郎　早川　庄八

原　秀三郎

監　事　関　晃　土田　直鎮